

## 《日蓮主義研究》

# 宮沢賢治の日蓮聖人観

石川 教 張

(現代宗教研究所主任)

一

昭和八年九月二十一日、宮沢賢治が三十八歳(数え年)の生涯を閉じてからすでに半世紀の歳月が経過した。

周知の通り、宮沢賢治は、詩作と童話を通して「法華文学」の創作をめざし、科学者及び農民の友として農村改善の活動と農民芸術の創造に取組んだ法華経の信仰者であった。<sup>(1)</sup>

賢治の献身的な生き方が法華経信仰に支えられていたことは、法華経を究竟の幸福をもたらす誠の力の根源としてとらえ、法華経の題目をその限りない光明とみなしていたことから明らかである。

至心に帰命し奉る万物最大幸福の根原妙法蓮華経 至心に頂礼し奉る三世諸仏の眼目妙法蓮華経 不可思議の妙法蓮華経もて供養し奉る一切現象の当体妙法蓮華経

保阪さん 私は愚かな鈍いものです 求めて疑つて何物も得ません 遂にけれども一切を得ます 我れこれ一切なるが故に悟つた様な事を云ふのではありません 南無妙法蓮華経と一度叫ぶときは世界と我と共に不可思議の光に包まれるのです ああその光はどんな光か私は知りません 只斯の如くに唱えて輝く光です 南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経<sup>(2)</sup>

法華経への至心の帰命と法華経の題目の光に包摂され

つつ万物最大の幸福を求めた希願の一念は、賢治の貫いた魂のしるしにほかならなかつた。それは「南無妙法蓮華経は空間に充滿する白光の星雲であります」<sup>(3)</sup>と記していることや、昭和六年に両親にあてて、「どうか信仰といふのではなくても、お題目で私をお呼びだしてください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします」<sup>(4)</sup>と書きしるしたように、法華経の題目に死後なお自己の生命をとどめようとした精神の内奥にもうかがい知ることができよう。

ところで、このような賢治における法華経帰命の精神のうちに、日蓮聖人への帰依鑽仰の念が結晶されていたことはきわめて重視すべき事がらであらう。

早く早く法華経日蓮聖人に御帰依遊ばされ一家同心にして如何にも仰せの様に世諦に於てなりとも為法に働く様相成るべく至心に祈り申上げます。<sup>(5)</sup>

「法華経日蓮聖人」と表現した嘗為こそ、賢治の到達した信仰精神であつた。それは、南無妙法蓮華経の首題の左右にそれぞれ南無を冠して釈迦・多宝の二仏と上行等の四菩薩をあらわした曼荼羅を手帳に書きしるして礼

拝しつづけ、晩年に至るまで変わることがなかつた。<sup>(6)</sup>「法華経日蓮聖人」を一体とみなした賢治の法華経信仰にとつて、日蓮聖人はいかなる存在であつたのであろうか。

## 二

宮沢賢治がはじめて日蓮聖人に言及したのは、二十三歳の時である。友人保阪嘉内に対して、次のように書き送っている。

やがて一切の現象を自己の中に抱蔵する事ができる様になつたらその時こそは高く高く叫び起ち上り、誤れる哲学や御都合次第の道徳を何の苦もなく破つて行くうではありませんか。私の遠い先生は三十二かにおなりになつて始めてみんなの為に説き出されました。<sup>(7)</sup>

この書簡は、大正七年三月二十日前後に書かれたもので、国柱会に入会する二年前に當つて注目に値する。ここでは、日蓮聖人の名を明示してはいないものの、三十二歳の時に初めて説き出した「私の遠い先生」

が清澄山で法華経を初めて弘通した日蓮聖人と、日蓮聖人による立教開宗をさしていることは明白である。

この頃の賢治は、念仏を奉ずる父と信仰の上で対立し、法華経信仰を持ちながらいかなる職業に従事するかに懊悩し、しかもなお父母を法華経に導くことによつて誠の報恩を実現したいとの願いを抱いており、他方では、これまで法華経への帰依をすすめていた友人、保阪嘉内が退学処分を受けるといふ事態に直面したのである。賢治は、その時、誠の報恩をめざして法華経を最初に弘め、

しかも進んで謗法批判に立ち上つた日蓮聖人の実践を自らにひきつけてうけとめ、賢治自身の取組む法華経信仰の進むべき道をさし示してくれる導きの「先生」として日蓮聖人との出会いを実感したのではあるまいか、と思われる。

「私の遠い先生」という表現は、賢治にとつて時間的にも空間的にも遠い存在であるということではない。例えば、童話『双子の星』に、尊敬すべき空の王様すなわち仏陀に比すべき存在を、「王様はこの私の唯一の王でございます。遠いむかしから私めの先生でございます」<sup>(8)</sup>と

書いているように、遠い昔から今に至るまでずっと限りなく自己を導いてくれている久遠の師という意味である。法華経の「当体」にもとづいて、一切の現象を自己の中に包蔵し、「十界百界の依て起る根原妙法蓮華経」<sup>(9)</sup>に身を任せて「誤れる哲学」や「御都合次第の道德」を打破してゆくための先駆的な導きの師として、はるかに賢治は日蓮聖人の実践的姿にあいまみえたのである。「私の遠い先生」、これが第一にあげられる賢治の日蓮聖人観である。

第二は、賢治が日蓮聖人遺文を読みつつ「聖者・日蓮大菩薩」の心にふれていたことである。賢治は、大正七年六月二十六日に母を亡くした保阪嘉内に、次のように書き送っている。

あなた自らの手でかの赤い経卷の如来寿量品を御書き  
なつて御母さんの前に御供へなさい。あなたの書く  
のはお母様の書かれると同じだと日蓮大菩薩が云はれ  
ました。あなたのお書きになる一一の経の文字は不可  
思議(議)の神力を以て母様の苦を救ひもし暗い処を  
行かれれば光となり、若し火の中に居られ、ば(あ

この仮定は偽に違ひありませんが、水となり、或は金  
色三十二相を備して説法なさるのです。<sup>(10)</sup>

さらに保阪からの返書を読んだ賢治は、同年七月二十  
四日付の書簡の中で、「あの葉書は実はあのあなたの御葉  
書が日蓮大士の御消息にそっくり同じ文勢の様に読んで  
びっくりして書いたのです。あなたの御心持の中に、  
この聖者が深く刻まれて居たら御手紙もその御消息に似  
て来るのは勿論の事です」<sup>(11)</sup>とも述べている。

おそらく賢治は、「此経一部八卷二十八品六万九千三百  
八十四字、一々に皆妙の一字を備えて三十二相八十種好の仏  
陀なり」<sup>(12)</sup>「此経の文字は皆悉く生身妙覺の御仏也」<sup>(13)</sup>「仏は  
法華経をさとらせ給ひて、六道四生の父母孝養の功德を  
身に備へ給へり……教主積尊は此功德を法華経の文字と  
なして一切衆生の口になめさせ給ふ」<sup>(14)</sup>の一節や、「やみ  
には燈となり、渡りには舟となり、或は水ともなり、或  
は火ともなり給ふなり。若し然ば、法華経は現世安穩後  
生善処の御経なり」<sup>(15)</sup>などの「日蓮大士の御消息」を、そ  
の文勢に至るまで深く心に刻んで読み、〈文字の仏〉にこ  
められた無量無辺の功德を伝えたのであらうと考えられ

る。ここには賢治が日蓮聖人の消息に心を合わせ、そこ  
から〈聖者・日蓮大菩薩〉としての日蓮聖人を仰ぎみつ  
つ、日蓮聖人の説いた教えに従って生死の救いを語った  
点が表示されている。「ああ生はこれ法性の生、死はこれ法  
性の死と云ひます。只南無妙法蓮華経 只南無妙法蓮華  
経。」<sup>(16)</sup>このように述べ、また「起是法性起滅是法性滅」<sup>(17)</sup>  
の語を書きしるした賢治が、その背後にうけとめていた  
ものは、日蓮聖人の説く「生死も唯妙法蓮華経の生死也。  
天台の止観に云く、起は是法性の起、滅は是法性の滅  
云々。釈迦・多宝の二仏も生死の二法也」<sup>(18)</sup>の言葉であつ  
たと思われる。

### 三

賢治の法華経信仰は、大正三年の秋、十八歳の時に〈赤  
い経巻〉すなわち島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』を  
読んだことに始まる。これ以来、賢治は島地大等の法話  
を盛岡市北山の浄土真宗願教寺で聴聞し、個人的にも大  
等を訪問して教えを聞くなど、主として島地大等を通し

て法華経信仰の道を歩んできていた。また、同じ北山の曹洞宗報恩寺に尾崎文英を訪ねて参禅し、朝には般若心経、夜は普門品を読み、さらに法華経如来寿量品の読誦を行なっている。ところが、さきに掲げた大正七年三月二十日頃の書簡を書いた前後に、賢治は〈赤い経巻〉を友人保阪に贈呈し、俄かに「私の遠い先生」日蓮大士への帰依を表白すると同時に、〈聖者・日蓮大菩薩〉に導かれた法華経信仰を鮮明にしていくのである。これは、島地大等を通じた法華経信仰から日蓮聖人に随順する法華経信仰への転換を意味している。この法華経信仰のありように関する転換が大正七年であったことは、注視されるべきところである。

こうした賢治における法華経信仰の転換を促した契機は何か。小倉豊文氏は友人関徳弥から、賢治が国柱会入会以前に姉崎正治著『解説要本法華経の行者』（大正六年四月刊）を読んでいた点にふれ、同書によって法華経と日蓮、ならびに日蓮における題目と曼荼羅の関係を知ったのではあるまいかと指摘している。<sup>19)</sup>また、大正十年一月二十三日に賢治は、「頭の上の棚から御書が二冊ともばつ

たり背中に落ち」<sup>20)</sup>たことをきっかけとして上京しているが、この二冊の御書は加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』と、田中巴之助監修『類纂高祖遺文録』、または柴田一能編『日蓮宗聖典』であったと思われる。先述の如く、賢治は、すでに少くとも大正七年三月二十日前後には、「日蓮大士の御消息」を読んでいることは明らかであるから、『解説要本法華経の行者』によって日蓮聖人の生涯とその信仰実践への理解を一層深め、日蓮聖人遺文を読むことよって日蓮聖人の心奥にふれつつ、〈先生〉であり、〈聖者〉である日蓮聖人への帰命を宣言していったものと考えられる。しかも、大正七年段階での賢治は、折伏による父母報恩の実現をめざして、「今や摂受を行ずるときではなく、折伏を行ずるときだそうです。けれども慈悲心のない折伏は常に功利心に過ぎません」<sup>21)</sup>と披瀝し、折伏を先とする日蓮聖人による摂受折伏の実践と真実報恩の成就とを一体とみなした信仰姿勢に従って行動しようとしていたのである。この日蓮聖人に導かれた報恩実践については、『開目抄』の一文にもとづいて、「『この経は、内典の孝経なり』本当の孝道はこの道しかございま

せん」<sup>(22)</sup>と主張した点にもみられるところである。さらに「但信行俗」の身をもって報恩と摂受折伏に取組む基本的立場と内容を主として日蓮聖人遺文によって再確認するため、翌大正八年頃に『撰折御文・僧俗御判』<sup>(23)</sup>を編んでいることから看取されるのである。

この大正七年段階における日蓮聖人への帰依鑽仰は、やがて大正九年十月に国柱会への入会する機縁をもたらし、日蓮聖人への帰命を基底とする法華経信仰形成の土台となっていくのである。

第三は、国柱会に入会したのち、〈末法の大導師・本化上行日蓮大聖人〉への帰命を高唱したことである。賢治は国柱会信行部に入会するに当って、「最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです」<sup>(24)</sup>と述べている。それは、「妙法蓮華経の法体であらせられ」<sup>(25)</sup>る日蓮聖人と田中智学が四十年來心の上で離れたことがないという認識にもとづくものであった。

これは賢治が、『日蓮聖人乃教義』『妙宗式目講義録』などによって、日蓮聖人を法華経の発現、生きた法華経

とみなし法華経の人格体として現われた存在と主張する田中智学の日蓮聖人観をそのまま受容したことを示している。「九識心王大菩薩即ち世界唯一ノ大導師日蓮大上人ノ御前ニ捧ゲ奉リ新ニ大上人の御命ニ従ツテ起居快シテ御違背申シアゲナイコトヲ祈リマス」<sup>(26)</sup>という祈念は、智学における法華経の法体としての日蓮聖人観に対する随従の姿勢を語ったものである。

こうして賢治は、国柱会入会の直後より「末法唯一の大導師、我等の主師親日蓮大聖人に帰依することになりました」<sup>(27)</sup>と表明し、「末法の大導師、絶対真理の法体、日蓮大聖人を無二無三に信じてその御語の如くに従ふこと」<sup>(28)</sup>を決意することによって、「日蓮主義者」<sup>(29)</sup>および「大聖人門下」<sup>(30)</sup>の立場にたちながら法華経信仰を語り伝える道を歩みつづけてゆくことになったのである。

今や末法教主日蓮大聖人に我等諸共に帰し奉り慈訓の如く敢て違背致しますまい。辛い事があつても大聖人御思召に叶ひ我等一同異体同心ならば辛い事ほど楽しんでいことです。<sup>(31)</sup>

本化日蓮大聖人、斯の人間に行じ給ひて能く衆生の

闇をば滅す。讃ふべき哉、仰ぐべき哉、総別の二義相  
叶ひ、実に妙法の法体に渡らせ給ふ。至心に謝し奉る  
末法唯一教主上行大薩埵。<sup>(32)</sup>

賢治は、このように釈迦仏より総別二義にわたって法  
華経弘通を付嘱された仏使上行菩薩としての日蓮聖人を  
讃嘆し、唯一の「末法教主日蓮大聖人」の体現した法華  
経における忍難慈勝の「慈訓」「御思召」に信従し、その  
「慈訓」の受持に徹してゆく覚悟を烈々と宣言したので  
ある。

すべてはすべては大聖人大悲の意輪に叶はせ給へ。<sup>(33)</sup>  
先づは静に大聖人の大慈悲をお伝へなされ如来の御思  
召をお語りなされ。<sup>(34)</sup>

賢治は、日蓮聖人の大慈悲を胸中に刻み、仏陀釈尊の  
教えを体しつつ、〈法華経日蓮聖人〉の「慈訓」を活現し  
語り伝えるという根本姿勢にもとづき、「如来の使」<sup>(35)</sup>と  
の自覚にたつて「法華文学」の創作に没頭し、やがて羅  
須地人協会を中核とする、明るく生き生きとした農村の  
建設と農民芸術の創造に献身してゆくのである。

こうした賢治における〈法華経日蓮聖人〉への帰命は、

賢治の法華経信仰がその背後に「末法教主」「唯一の大導  
師」、そして法華経の法体である仏使上行菩薩としての日  
蓮聖人に対する随従帰依を内在させるものであったこと  
を意味している。賢治が法華経信仰を語った時、そこに  
は、「如来の御思召」と共に、「大聖人の大慈悲」が結晶  
されていたことを見落すべきではないと考える。同時に、  
「法華文学」の創作は、釈迦仏・法華経の信仰精神とそ  
れを体現する日蓮聖人の「意輪」を実現し、その「慈訓」  
を表象した信仰実践のあかしでもあったのである。しか  
も賢治は、〈法華経日蓮聖人〉の大慈大悲の心を童話や詩  
作に活現し、子供たちの心にその種をうえて美しく発芽  
させることを念じ、不軽菩薩の生き方を根底とするデク  
ノボウ精神にもとづき、貧寒とした東北農村の現実には踏  
みこんで農村改善の活動に取組み、さらに銀河系宇宙と  
一体化した心象によって生きとし生ける者の十界成仏を  
希願しつづけたのである。この「法華文学」を基調とす  
る芸術創造の目的は、「みんなといっしょに無上菩提に至  
る橋梁を架し、みなさまの御恩に報ひやうと思ひます」<sup>(36)</sup>  
という言葉に凝縮されているのである。――「これからの

宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。<sup>(7)</sup> 宗教と芸術の一体性、換言すれば、法華経信仰の活現と芸術の創造を一つのものとみなした「法華文学」の創作は、日蓮聖人の大慈悲と如来の教えを語り伝え、宗教と芸術全体を包摂した賢治の信仰的生き方から生みだされたものであったと云えよう。このように、賢治の法華経信仰は、日蓮聖人の「慈訓」を包み入れたものであったと考えられる。

これ以降も賢治が日蓮聖人への讃嘆帰命から離れることがなかった事実は、大正末年に書かれた『法華堂建立勸進文』<sup>(8)</sup>において日蓮聖人一代の足跡を礼讃し、「本化上行菩薩」における「末法救護の大悲心」をうたいあげていることによっても明らかである。

賢治は、法華経信仰と日蓮聖人への帰命を一体とみなし、「私の遠い先生」「末法救主」日蓮聖人に導かれながら、妙法の法体としての本化上行菩薩日蓮聖人に随従し、その日蓮聖人の「慈訓」を体現しつつ、日蓮聖人の求め弘めた法華経の理想世界実現を希求するとともに、大いなる徳の力に包まれて誠の報恩と幸福がなしとげられる

道を献身的に歩みつづけたのであった。賢治は、法華経の信仰者であるとともに、日蓮聖人の「慈訓」を活現し、それを現実の問題状況のなかで実践した法華経の地人であり、(聖者日蓮大菩薩)のきり開いた「まことの心」に生きた真の「日蓮主義者」でもあった、と云えるであろう。

#### 註

- (1) 「法華文学」の名称は『校本宮沢賢治全集』筑摩書房刊(以下『全集』と略す)第十二巻上、七二頁。「雨ニモマケズ手帳」にみえる。宮沢賢治の生涯について筆者は、『文学作品に表われた日蓮聖人』(国書刊行会刊)の中でふれたことがある。
- (2) 『全集』第十三巻、五六頁。保阪嘉内あて書簡(大正七年三月二十日前後)。
- (3) 『全集』第十三巻、六九頁。保阪嘉内あて(大正七年五月十九日)。
- (4) 『全集』第十三巻、三七九頁。宮沢政次郎・イチあて(昭和六年九月二十一日)。
- (5) 同右、二〇八頁。宮沢政次郎あて(大正十年二月二十四日)。
- (6) 『全集』第十二巻上、四六一―四七頁。「雨ニモマケズ」手帳の次頁に記されている。
- (7) 『全集』第十三巻、六五頁。保阪嘉内あて(大正七年三月二十日前後)。



- (8) 『全集』第七卷、三五頁。
- (9) 『全集』第十三卷、四七頁。宮沢政次郎あて(大正七年二月二十三日)。
- (10) 同右、八九頁。保阪嘉内あて(大正七年六月二十六日)
- (11) 同右、九七頁。保阪嘉内あて(大正七年七月二十四日)
- (12) 『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定遺』と略す)「開目抄」五七〇頁。
- (13) 同右、「曾谷入道殿御返事」九一二頁。
- (14) 同右、「法蓮抄」九四四頁。
- (15) 同右、「弥源大殿御返事」八〇七頁。
- (16) 『全集』第十三卷、五六頁。保阪嘉内あて(大正七年三月二十日前後)
- (17) 同右、四七頁。宮沢政次郎あて(大正七年二月二十三日)
- (18) 『定遺』「生死一大事血脈抄」五二二頁。
- (19) 小倉豊文著『雨ニモマケズ手帳』新考」六〇―六二頁。
- (20) 『全集』第十三卷、二〇二頁。関徳弥あて(大正十年一月三十日)。
- (21) 同右、五三頁。保阪嘉内あて(大正七年三月十四日前後)
- (22) 同右、二〇四頁。保阪嘉内あて(大正十年一月三十日)
- (23) 『全集』第十二卷下、三四八―三六二頁。草野心平編『宮沢賢治研究』三八―三九六頁。この点に関しては拙著『日蓮と近代文学者たち』(ビタカ刊)二一一―二二三頁参照。
- (24) 『全集』第十三卷、一九三頁。保阪嘉内あて(大正九年十二月二日)
- (25) 同右。

- (26) 同右、一八六頁。保阪嘉内あて(大正九年七月二十二日)。これは田中智学著『日蓮聖人乃教義』四三九頁に拠っている。
- (27) 同右、一九四頁。保阪嘉内あて(大正九年十二月二日)
- (28) 同右、一九五頁。保阪嘉内あて(大正九年十二月上旬)
- (29) 同右
- (30) 同右、二〇五頁。保阪嘉内あて(大正十年一月三十日)
- (31) 同右、二〇四頁。保阪嘉内あて(大正十年一月三十日)
- (32) 同右、二〇六―二〇七頁。保阪嘉内あて(大正十年二月十八日)
- (33) 同右、二〇五頁。保阪嘉内あて(大正十年二月上旬)
- (34) 同右、二〇六頁。
- (35) 同右、二一七頁。保阪嘉内あて(大正十年七月下旬)
- (36) 同右、二二七頁。宮沢政次郎あて(大正十五年十二月十二日)
- (37) 同右、二一五頁。関徳弥あて(大正十年七月十三日)
- (38) 『全集』第十二卷下、三〇六―三一三頁。

追記 この小稿は第三十六回日蓮宗教学研究大会にて発表  
した内容に加筆して改めてまとめ直したものである。